



Title	日本軍「慰安婦」を描いた絵本『花ばあば』出版をめぐって : 生き抜いた女性たちの存在を伝えたい
Author(s)	渡辺, 美奈
Citation	日本学報. 2019, 38, p. 24-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【特集】

日本軍「慰安婦」を描いた絵本『花ばぁば』出版をめぐって
生き抜いた女性たちの存在を伝えたい

渡辺 美奈

日本・中国・韓国の絵本作家たちが「平和絵本」の出版プロジェクトを立ち上げた。日中韓各1社がそれぞれ11作品を出版する予定が、その中の韓国人作家が描いた日本軍「慰安婦」の絵本だけを、日本の出版社、童心社は出版しなかった。ようやく今年、出版を望む声によって日の目をみることになった。「女たちの戦争と平和資料館」(wam)館長の渡辺美奈さんの報告。

今年4月、日本軍「慰安婦」をテーマに描いた絵本、『花ばぁば』の日本語版が出版された。韓国を代表する絵本作家、クォン・ユンドクさんが、大邱(テグ)に住んでいた「慰安婦」被害者、シム・ダリョンさんをモデルにした絵本で、国家の暴力や社会に影響を受けながらも生き抜いた一人の女性を、韓国伝統美術の技法を用いた美しい絵で描いた。

4月下旬にはクォンさんが来日し、都内で出版記念シンポジウム「絵本で伝える戦争と暴力」(wam主催)が開かれた。日本の絵本作家の田島征三さん、浜田桂子さんを交えたトークでは、作家たちが作品に込めた思いとともに、なぜ『花ばぁば』を日本で出版するのに8年もかかったのか、その経緯が語られた。

作家が批評しあって

『花ばぁば』は、日中韓の絵本作家が平和のための絵本を作ろうと集った「日・中・韓 平和絵本」シリーズの一つだった。右傾化が進むなか、「アジアに対する侵略という苦い過去を見つめ、平和の大切さを絵本で世界の子どもたちに伝えたい」という田島さんから日本の作家からの呼びかけに中国、韓国の作家が応答した。クォンさんも韓国から参加した一人。2006年の初顔合わせの時から、「慰安婦」をテーマに描きたい

と申し出て、日本の作家たちは出版すると約束した。

3カ国3社の出版社も交えて正式にスタートしたのは07年。このプロジェクトは日中韓12人の絵本作家（途中で1人断念）が互いに作品を批判し合い、議論しながら制作するという、これまでにないプロセスを辿った。例えば、浜田さんの絵本『へいわってどんなこと？』では、当初、「平和って、空から爆弾が落ちてこないこと」という受け身の文章だったが、中韓の作家から被害者意識丸出しだと痛烈に批判されたという。

浜田さんは「せんそうをしない」「ばくだんなんかおとさない」「いえやまちをはいしな」と、子どもによる宣言にした。このような議論は信頼が深まったからこそ可能で、絵本はより力強く、東アジアで通用する平和を示したと浜田さんは振り返った。

普遍的メッセージとは

クォンさんも、何度も作品を作り直し、その試作は10点を超えるという。幼い時に性虐待を受けたクォンさんは、「性暴力の痛みなら誰よりもうまく描けると思っていた」と取材で語っているが、「慰安婦」にされた女性の被害証言を読んで負の感情が湧きあがり、当初は誰も見たくないような怖い絵を描いた。

制作の過程では、日本を悪にするのではなく、普遍的な戦争と性暴力の問題として描きたいと表現に苦心した。日本を象徴する天皇や菊の絵を消して、軍国主義を黄土色で表現、軍艦が当然掲げているはずの旭日旗さえ消した。シム・ダリョンさんの証言があいまいな部分については描きなおした。そして何よりも、当事者であるシムさんに喜んでもらえるよう、暴力をむき出しに描くのではなく、シムさんが好きだった花をモチーフに美しい絵本に仕上げた。

新たな出版社から

この「日中韓 平和絵本」シリーズの出版を日本で担った童心社は、他の10冊は世に送り出したが、クォンさんの本だけは出版しなかった。理由は「事実と違う部分がたくさんある」（共同通信18年2月8日配信）としているが、具体的にどの場面が「事実と違う」のかは明示していない。

シンポジウムで田島さんは、編集者が右翼への恐怖を語っていたことを紹介し、「出さなかったのは童心社で、その判断は明らかに間違っている」としたが、これまで平

和をテーマに優れた本を世に送り出してきた大手出版社が取りやめた影響は大きかったという。どうにかクォンさんの絵本を出したいと、田島さんも浜田さんも出版社探しに奔走したが、「童心社が拒否したものをうちが出すわけにはいかない」との反応や、編集者はやりたいと言っても、1週間後には「上のものが…」と断りの連絡が入った。相談も含めれば20社近くにあたって、最後に出会ったのが、「絵本の経験がなく、弱小で、右翼を怖がらない」出版社、「ころから」だった。

絵本の印刷はお金がかかる。「ころから」代表の木瀬貴吉さんがクラウド・ファンディングで資金を募ると、4日間で目標金額を達成した。この絵本の出版を心待ちにしていた人がある一方、できあがった『花ばあば』を書店が置いてくれない状況は続いている。

「慰安婦」として戦争と性暴力を生き抜いた女性たちの圧倒的な存在に出会った作家によって、今後さまざまな作品がつくられるだろう。自由な表現と批評の空間を守るためにも、出版業界と私たち読者の姿勢が問われている。

(なお、本稿は『ふえみん』2018年7月5日号に掲載されたものを再録したものである。<http://www.jca.apc.org/femin/index.html> を参照)



左写真) 2010年6月9日、韓国・大邱で行われた出版パーティーで。右がシム・ダリョンさん。絵本を見たシムさんは、「きれいに描いてくれてありがとう、あなたは絵の素質があるね」と語ったという。シムさんは押し花が得意で、数々の作品を残し、同年12月に亡くなった。左はクォン・ユンドクさん。1960年生まれ。済州島の四・三事件を描いた『木のはんこ』など、社会性のある作品も手がける(提供 ヒウム日本軍「慰安婦」歴史館)

渡辺 美奈(わたなべ みな)

女性の人権や戦時製暴力問題に取り組むNGOでの活動等を経て、現在はアクティブ・ミュージアム「わたしの戦争と平和資料館」(wam)館長。日本軍「慰安婦」問題の解決に向けて、国連人権理事会、女性差別撤廃委員会など、国連の人権機関等に対しても情報提供を続けている。共著に『「村山・河野談話」見直しの錯誤—歴史認識と「慰安婦」問題をめぐって』(2013年、かもがわ出版)など。